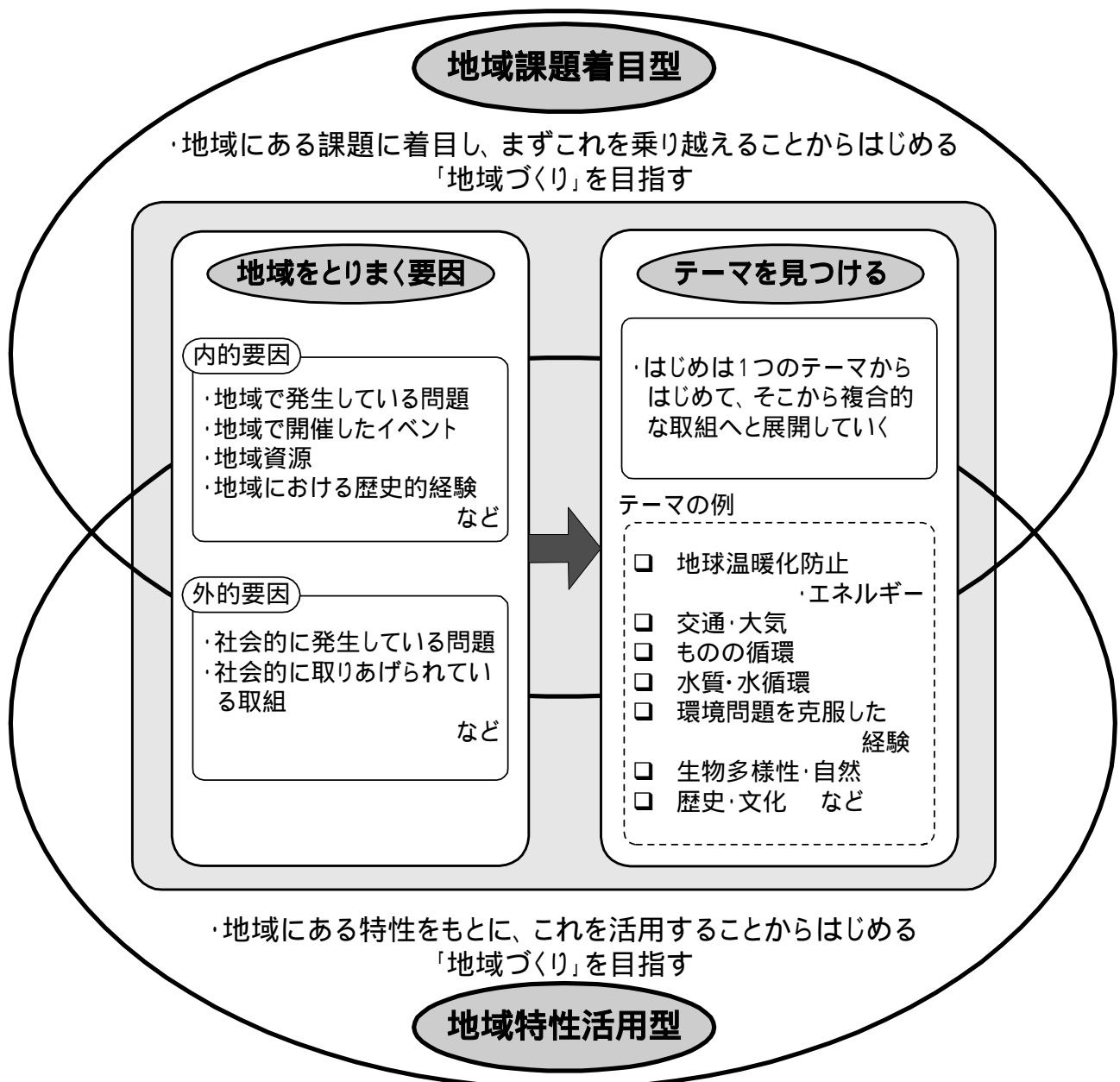


(1) きっかけ

❖ 「地域づくり」を進めるうえで入口となるテーマを見つけましょう

- 「地域をとりまく要因」から地域として取り組むテーマを見つけます。
- 1つのテーマから始めて、複合的な取組へと展開していきましょう。
- テーマは「地域課題着目型」と「地域特性活用型」に分けられます。これらは互いに重なり合う部分を持っています。



きっかけ

身近なことから広い取組に

- 先進事例での取組は、身近なきっかけから始まっていることが多いようです。まず、行動です。小さなことをきっかけに、広い取組まで育てていきましょう。
- 「きっかけ」は、狭い意味の「環境問題」や「自然保護」に限りません。農業、林業、食、福祉、教育などなるべく広い範囲から探してみましょ。

地域の環境に関する課題の解決に取り組む

ゴミの処理の問題、川の水質の問題、身近な生物がいなくなることなど、地域の身近な環境に関する課題を解決するために、どんな取組ができるか考えてみましょう。

【事例1】ヌップク川（北海道帯広市） 河川へのゴミの不法投棄をきっかけに

ヌップク川（北海道帯広市）では、河川へのゴミの不法投棄を片づける市民の活動から取組が始まりました。現在では、河川の生態系の保全のため、帯広市自然環境保全条例(平成4年4月1日条例第17号)に基づき自然環境保全地区としての指定や、市民の活動を活かしたグラウンドワークなどの取組に広がっています。

参考：<http://tech.obihiro.ac.jp/~nuppuku/> 「資料編 事例集」

地域資源を活用する

地域の自然、風景、歴史、文化、産業などを見直して、地域で自慢できるもの（地域資源）を探してみましょ。地域振興や地域づくりのきっかけが見つかります。

【事例2】宮崎県綾町 健康づくり、家庭菜園運動からはじまる有機農業

宮崎県綾町では、健康づくりを目的とした家庭菜園での有機農業の運動がきっかけとなっています。現在では、地域をあげた有機物のリサイクル、有機農業の振興に取り組んでいます。

参考：<http://www.miyazaki-nw.or.jp/ayatown/norin.html> 「資料編 事例集」

【事例3】岡山県美星町 美しい星空、美星町という町名を活用する

岡山県美星町は、町名の通り、天体観測に適した条件がそろった地です。このため、まちおこしのテーマとして「星の郷」を設定し、夜空の保全につとめながら、地域振興に取り組んでいます。

参考：<http://www.town.bisei.okayama.jp/town/> 「資料編 事例集」

その他のきっかけ

地域づくりにかかわるコンテストで表彰されたり、環境に関係する会議が開催されたりすることで、地域の意識が一気に高まるのがきっかけになった地域もあります。

【事例4】京都府京都市 COP3 京都の開催をきっかけにして

京都市では、以前から環境への取組は進められていましたが、1997年12月に開催された気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3、京都会議）の会場となったことをきっかけとして、地球温暖化対策への意識が高まり、市民や事業者が自ら主体となって「京（みやこ）のアジェンダ21」を作りました。

参考：「資料編 事例集」P27「コラム 京（みやこ）のアジェンダ21」

地球温暖化と地域づくり

地球温暖化による影響が現れるのはまだまだ先のことと言われていますが、異常気象で桜の開花が大幅に早まるのを目の当たりにすると、もし温暖化が進んだら、地域の四季折々の自然がどうなるのかと、気になります。身の回りにどんな変化が起きるかを考えてみるのが、温暖化防止に向けて取り組むことの大切さを実感するきっかけになるでしょう。

日本では、CO₂（二酸化炭素）が、温室効果ガス排出の9割以上を占めています。CO₂の排出は私たちのあらゆる営みと結びついており、その営みは地域ごとのさまざまな背景の上に成り立っています。CO₂の排出を減らすには、エネルギーの消費量自身を減らしたり、自然エネルギーへの切り替えを進める必要があります。日照時間の長い地域での太陽光発電や太陽熱利用、風の強い地域での風力発電、林業の盛んな地域での木材のエネルギー利用などは、地域の特徴を生かした取り組みといえます。地域の中にこうした施設をもち、自立度を高めていくことは、災害時のライフライン確保という面からも注目されます。

一方、こうしたエネルギーの供給面だけでなく、エネルギーの消費が、地域の営みとどう関わっているかに目を向けることも大切です。自家用乗用車からのCO₂排出量は過去10年間に50%あまりも増加しました。クルマの利用をライフスタイル面から見直すこととあわせて、クルマに過度に依存しなくても生活しやすいような街づくり、地域づくりをしていく必要があります。また、地域ごとの気候にあった建物構造や技術の普及が、住宅やビルの冷暖房のために消費されるエネルギーの抑制には有効です。温暖化問題には長期的な取り組みが必要であり、その意味では、地域の営みを支えるインフラ整備の中に、エネルギーや資源の無駄な消費を減らすという視点を組み込んでおくことが重要です。むろん、そこに地域の人々の多様な意見を反映させていくことを忘れてはなりません。

（森口祐一 国立環境研究所）

持続可能な地域づくりとは

“持続可能社会”という言葉がよく使われるようになったのは、リオサミットで提案された“sustainable development”が契機でした。この言葉が使われるようになったきっかけは、地球環境は人類の永続的な生存を保障できないほど危機的状況にあるという認識でした。この言葉の「持続」は、はじめは「地球規模での人類生存基盤」を対象としていましたが、いま各方面で使われている「持続可能」という言葉の意味は極めて多様になっています。例えば、“鉄は再生して繰り返し使えるので持続可能な材料である”といったレベルで、特定の対象物などに対しても用いられています。

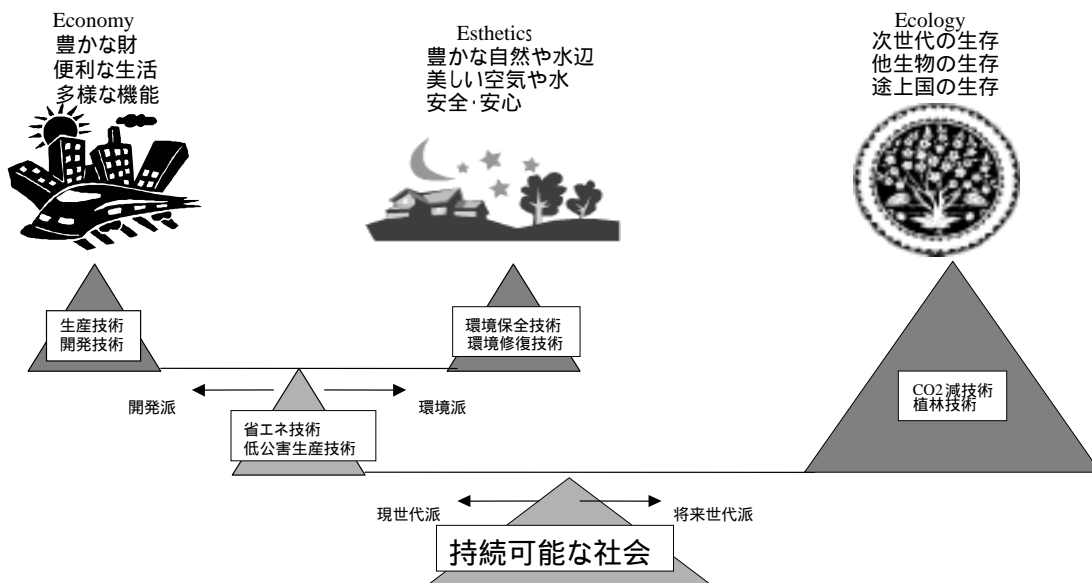
「持続可能な地域づくり」における持続可能性は、大きく二つの内容を指しています。一つは、“think globally, act locally”の理念に沿って、地球環境の持続性を実現するために地域社会はどうあるべきか”という意味。この場合の目標は、地球環境の保全であり、行動内容は、例えば地球温暖化防止のためのCO₂排出削減のための省エネ型ライフスタイルの実現や、地球にやさしい家や街さらに交通システムづくり、といったものです。近年ローカルアジェンダという呼称で、各自治体が熱心に取り組んでいる活動に対応しています。

もう一つの「持続可能な地域づくり」は、地域社会が持続することを目的としたもので、いま地域社会が何によって持続可能性が脅かされているのかが問題となります。たとえば、廃棄物処分場があと2年しかない、地元商店街が急激にさびれていく、過疎・高齢化によって町村自体が崩壊していくといった、それぞれの地域に固有の問題です。この場合の、持続可能な地域づくりのありかたは、まさに千差万別であって、その地域づくりマニュアルというのは多様な地域状況を想定して、極めて多様なかたちで作られる必要があります。

二つの目標（「地球人類の持続」と「地域社会の持続」）の間には強い関係があることは言うまでもありません。しかし、項目によってはほぼ同じ方向性をもつものと、二律背反的なものがあるところに、この課題の難しさがあります。たとえば、ゴミ発生を削減することと地球負荷を減らすことはほぼ同方向の効果をもたらしますが、技術的な処理を行うとしたときは、そのやり方によっては地球負荷が大きく増大することもあります。

ここで言う「持続可能な社会づくり」とは、各地域が固有に抱える持続不可能な諸条件を克服するとともに、それが地球環境の持続可能性にも寄与する、いわば“地球にやさしい地域社会”をどうつくるかという、ハードからソフトにいたる施策の集大成を目指すものです。

（内藤正明 京都大学工学研究科教授）



多様な評価項目と各種技術の位置づけを示す評価図